

だれもが充実したいのちを燃やして生きることができるよう!

私たちは地域・職域・学校など、  
生活のいろいろな場面で  
「健康寿命」をのばす運動を  
実践しています。

# よぼう医学

THE NEWS OF HEALTH SERVICE

(平成8年5月20日第三種郵便物認可)

2004(平成16)年11月15日 第381号

(財)東京都予防医学協会  
(財)予防医学事業中央会東京都支部  
発行人 北川照男・編集人 山内邦昭  
発行所 〒162-8402  
東京都新宿区市谷砂土原町1の2  
保健会館 電話03(3269)1131  
http://www.yobouigaku-tokyo.or.jp

毎月15日発行 年間購読料300円(1部30円)



## ●—— 今月の主な紙面 ——●

- 1面 日本の子宮がん検診を科学的に評価
- 2面 特集 子どもの2型糖尿病とその長期予後 学童糖尿病検診は有用か
- 3面 連載「健康教育放浪記」第7回  
健康づくり・健康増進を支援するページ 第14回
- 4面 話題『子どもの生活習慣病予防の実際』を発行・中央会  
連載『いびき』よもやま話 第2回
- 5面 話題『子どもの生活習慣病予防の実際』を発行・中央会  
連載「産業医訪問」第61回
- 6面 電通「健康フェア」で、健康セミナーや健康相談を実施  
『改訂食事療法ガイドブック アミノ酸代謝異常症のために』が発行  
お知らせ  
人・往来

## 日本の子宮がん検診を科学的に評価

### 第13回 日本婦人科がん検診学会

## 「隔年受診」には条件が必要。検診の費用効果をあげるためには、若年層の受診率向上がカギ

死亡率減少に有効な検診をめぐり、がん検診の見直しが行われている。その中で、子宮がん検診について、今年4月に新たな指針が示された。この新指針で示された子宮がん検診をテーマに、11月6日、東京・千代田区のサンケイプラザで開かれた第13回日本婦人科がん検診学会学術集会(会長・宇田川康博、藤田保健衛生大学教授)で白熱した討議が行われた。今月は、その中で、子宮がん検診の科学的評価を行った八重樫伸生東北大学大学院教授の特別講演の要旨を紹介したい。



「検診の精度は、感度95%、特異度99%と、他のがん検診に比較して、次のように述べた。

「婦人科がん検診を科学する」と題して特別講演を行った八重樫伸生東北大学大学院教授(写真)は、同大学院の婦人科学教室と公衆衛生学教室が共同研究してきた研究成果をもとに、子宮がん検診について、今回の改訂に至るまでどういった科学的根拠があったのか、特に国内の検診に対する科学的な評価はどうであったかを、講演した。

まず子宮頸がん検診について、宮城県での検診データの解析をもとに検診の精度、有効性、費用効果を評価した。次のように述べた。

「検診の精度は、感度95%、特異度99%と、他のがん検診に比較して、次のように述べた。

「1回の細胞診による検診では見逃しが5%あること、日本の子宮がん検診の受診率は欧米諸国に比べて非常に低い。せいぜい22%程度でしかない。こういったことを考えると、現在の検診体制で直ちに『隔年受診で十分』であるとする科学的根拠はない、と言わざるを得ない。

次に、検診の費用効果であるが、行政の検診では費用に枠があり、それをどのように有効に使うか、その費用効果を分析する必要がある。われわれは、費用分析として1年間に1人救命するのに必要な費用を算出した。それによると、現行の子宮頸がん検診では406万円かかるという結果であった。これは大腸がん検診とほぼ同様、胃がん検診の約2.3倍である。将来、頸がんの罹患率は減少していくと予測されており、そうなると頸がん検診の費用効果は悪化していくと考えられる(図2)。そうならないためには、罹患率が増加傾向にある20代、30代の若年層の取り込みが重要になってくる。

このように述べて、八重樫教授は、頸がん検診の精度を高めるためには、隔年受診に「検診で数年間陰性であれば」という条件をつけることを提案した。さらに今後の課題として、国際的に有効性が認められたヒトパピロマトウイルス(HPV)のDNA検査導入に関するパイロット研究が必要だ、とした。

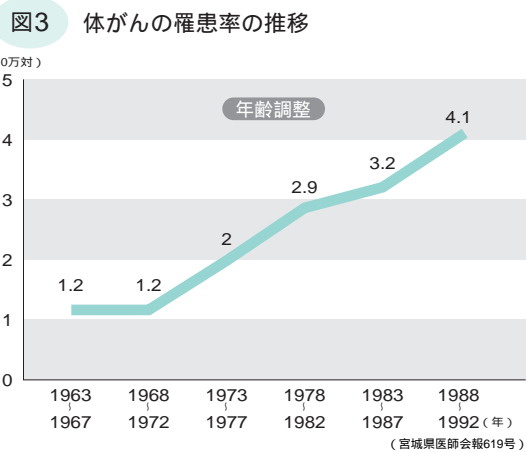
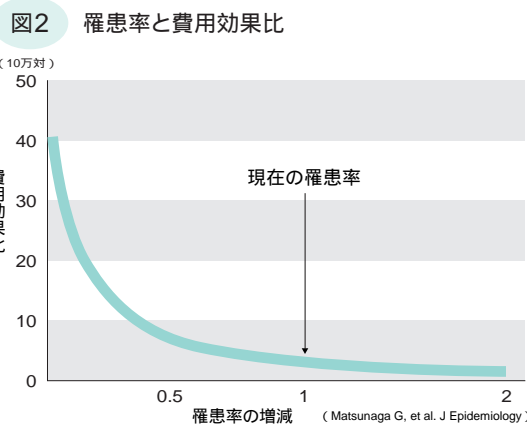
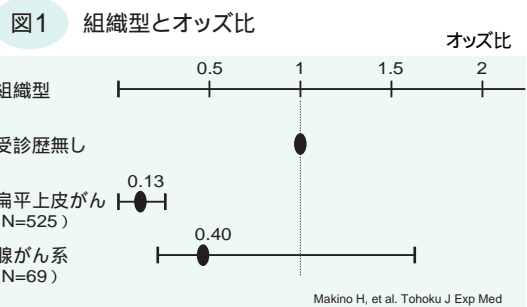
続いて体がん検診について、宮城県での検診データをもとに行なった検診精度と有効性の評価を、次のように述べた。

「体がん検診そのものの感度は83%、特異度は97%と他のがん検診に劣らないが、子宮がん検診全体のプログラムから見ると、感度は27%にすぎず、子宮がん検診を受けた人の中で体がんを持っていた人の73%は見逃されている、という成績であった。

また有効性の評価は、各施設の協力を得て1000例以上の症例を集め、検診で発見された群と外来で発見された群の死亡率を比較するという方法で行った。その結果、検診群の死亡率は外来群の半分以下という成績であった。ただしこの成績には2つのバイアスがあると考えられ、検診群の予後が良いのは検診の効果なのか、あるいはそれぞれで発見されたがんの成長速度が違っているためなのか、判断できない。

そのうえで八重樫教授は、「体がん検診の精度や有効性についてはこのようなデータしかないが、体がんの罹患率は増加の一途である(図3)。そのようながんを検診をしないで放置してよいのかという問題もある」と述べ、「がんの予防は、ますます重要になっている。国をあげたがん検診の取り組みが必要であり、行政への働きかけが何よりも重要である。そのためには諸外国のデータだけでなく、国内のデータを集めて科学的根拠を明らかにすることが必要であると考えている」と講演を締めくくった。

(同学会で行われたシンポジウム「若年の子宮頸がん検診」は次号以降で紹介の予定)



## 健康管理相談をお引き受けします

当センターの会員が事業所、学校、各種団体の健康管理をアドバイスいたします。

お問い合わせ・ご相談は 予約制)  
電話 東京(03)3269-1131  
健康管理コンサルタントセンター  
事務局 東京都新宿区市谷砂土原町1の2  
(財)東京都予防医学協会

### コンサルテーションのご案内

- 12月 1日 岡 惺治 (健康管理コンサルタント)
- 8日 三輪祐一 (東京都予防医学協会総合健診部長)
- 15日 岡 惺治
- 22日以降1月まで冬休み